

潤さ二三町、或ハ四五町許の海門なり、海潮南北に流れ、其漲り来る時は大河洪水の勢ひに似たり、故にその満涸を候つて通舟す、長島に渡たる所を黒の海門と呼ぶ」云云(『三国名勝図会』)。

萬葉集卷三 又長田王作歌一首

248 隼人乃薩麻乃迫門乎雲居奈須遠毛吾者 今日見鶴鴨

同卷六 帥大伴卿遥思 芳野離宮

作歌一首

960 隼人乃瑞門乃磐母年魚走芳野之滝尔 尚不乃家里

等、古くから歌に詠まれた。

31 伽志久利神社——加紫久利大明神社。鯖

淵字伽志久利山に鎮座。「応神天皇・神

功皇后・配享天照大神・宇佐明神・住

吉大神」の五坐を祀る。神名帳に「出

水郡一座(小)」とあるのがこの神社。

32 大野原——今の出水市と高尾野町にまた

がる洪積台地。大野原台地。武士の鍛練の場であった。

33 桜馬場——上鯖淵。霧降・渡瀬・松坂・

市之森と共に近世には上質な煙草を産した由。

34 笠山野牧——阿久根市から高尾野町にま

たがる山。旧藩時代は牧場があり優秀な馬を産出したという。

35 名護の浦——知識・下知識にある浦。こ

のあたり一帯平家伝説が多い。本歌もそれを詠みこんだもの。

36 野間の原——下鯖淵平松の野間原には野

間関があつた。肥後の国との分界に近くて大道が通り、海陸ともに表玄関としての位置に当るため最も重要な関所として著名。一六〇〇年(慶長五年)に開かれた。

(出典を記さないものも地名については『三国名勝図会』・『大日本地名辞書』

・『角川日本地名大辞典』46 鹿児島

県』・郷土誌関係の書籍等を参考して記した。)

記した。)

記した。)

後白河法皇像・源頼朝像の筆者と伝え

られる。和歌所寄人の一人で千載集以

下に六九首入集。歌の出典は群書類従

本『藤原隆信朝臣集』五六二番。「百

首うた合に、たつぬるこひ」からはじ

まる二十五首中にある歌、

おいたるこひ

562色にそむ心はおなじむかしにて人の

つらさに老をしるかな

○地名等について

(歌番号)

2 山川大奈木の池―開聞御池の一つ、鰻池。

5 大隅国奈毛木森―歌枕。大隅二宮大明神

(蛭子神社)の境内にある神叢。日本

書紀、蛭児雖二己三歳―脚猶不立、

故載之於天盤櫂樟船而、順風於葉云

々、の船が爰に漂到し、枝葉を生じた

と云われる「その古樟の神木は枯れて

タチガレ

榎幹の根株、竹林の中にあり」(三国名

勝図会)とある、本歌は、その古樟の

状態そのまゝを詠んだ歌となっている。

古今集卷第十九雑体 題しらず 讃岐

1055 ねぎごとをさのみききけむ社こそ

果はなげきのもりとなるらめ

6 清水台明寺青葉の竹―曾於郡山路村に

ある竹林山衆集院台明寺。「天智天皇御

勅願として創建あり…当山の地、青

葉竹の名産ある故に笛竹の貢御所に定

めらる、是より笛竹の名天下に高し云

云(三国名勝図会)。

13 大隅の古江のうら―肝属郡花岡邑古江村

木谷海岸(三国名勝図会)。一七二四年

(享保九年)花岡郷設置とともに浦と

して發達した、薩摩・大隅を結ぶ要港

だった。

15 18 波見のうら―高山町の海岸。県内三名

勝の一つ、風光明媚の地。肝属川の河

口にあたり、古く神武天皇船出の地と

しての伝説がある。

15 16 荒瀬川―現在、高山町大字波見から肝

属川合流点間の約三キロメートルを云

うという。

20 21 有明の浦―諸県郡志布志海岸。

23 松坂―古くは戦国期に見える地名。現

在の incoming 浦之名の小字名。牟多田の

布泊橋畔から南方の豊原台地へ登る途

中の坂道一帯の地名(角川、『日本地名

大辞典』鹿児島県による)

24 一野森― incoming 町、鎌倉期から見える地

名。 incoming 文書に「いちの、」と見える由。

今の incoming 町浦之名字市野々に比定され

る(角川『日本地名大辞典』)

25 日の丸―出水市武本の中の地名。江

戸期より御料たばこで名声を博した地。

27 霧降―右に同じく字武本の中の地名、

煙草の産地。

28 渡世口―右に同じ。上鯖淵の中の地名。

28 29 広瀬川―今の出水川。

30 矢筈―矢筈嶽。鯖淵にあり。「此嶽雄峯

・雌峯あり、雄峯は山峯並び峙て、箭

筈の状をなす、因て名を得たり」(三国

名勝図会)とある。

30 隼人のさつまのせと―「出水と長島の

間、海形狭隘にして、長さ三十町許、

みその、雪は今もかわらじ

霧降

27 こひころもあきもふかくやなりぬらん

そでさへぬる、霧ふりの里

渡世口

28 ひろせ川きりふりこめて乗駒も

わたせのくちをふみぞ煩ふ
〔四〕

廣瀬川

29 肥の国にとなる薩摩の廣せがわ

わかあゆのぼる春の初風

矢筈

30 隼人のさつまのせとの弓手なる

やはつがたけにしぐれふる見ゆ

伽志久利の神社

31 かしくりのかみのみやしろこけむして

ふりしすがたをけふみつる鴨

大野原

32 大君の大和島根のかためぞと

はやとの子らが練る大の原

桜馬場

33 手弱めが花のしら雪ふみ分て

さくらの馬場にあかも裾ひく
〔四ウ〕

笠山野牧

34 五月雨にふすひまもなき笠山野

あらし駒だに打しほれつゝ、

名護の浦

35 にしの海に身をしづめてし
とめて
あとそそれ

たひらのうぢをいつく浦人

野間の原

36 野間のはら月落かゝり関の戸の

おしあけがたの初かりの声

樓の上

37 かはらじと契りおきしか樓の上

たがうゑそめし忘草かも
〔五オ〕

〔注〕

○冒頭歌二首の作者について

俊成

永久二(一一一四)〜元久元(一二二〇)四。権中納言藤原俊忠男。千載集撰

者。『古来風躰抄』執筆。後鳥羽院歌壇

最盛期の九十一才没年まで歌壇の指導

者として活躍、御子左家学基礎を築い

た。ここに採られた歌は、家集『長秋

詠藻』(書陵部蔵(501・172)) (中)に

左のようにある歌である。

左大将の家に会すとて、歌くはふ

べきよしありし時の、恋歌

352こひせざば人はこゝろもなからまし

もの、あはれもこれよりぞしる

実隆

「三条西実隆」であるが、ここに実隆

の歌として記されている歌は、「藤原隆

信」の歌である。時言の思いちがいで

記したものであろう。「隆信」ならび

隆信

藤原隆信 康治元(一一四二)〜元

久二(一二〇五)。皇后宮少進為経の子。

定家の異父兄にあたる(母美福門院加

賀は後に俊成に嫁して、定家らを生ん

だ)。上野介・越前守・右京権大夫等を

穂深

10 大方は秋もやふかく成ぬらん

かどたの稲葉色つきにけり

解恋

11 吾妹子が□の下紐の解しより

こひしとのみが悲しかりけり

別恋

12 君が行都のかたにたつ

くものたちでもいでん

わすれかねつも

旅

13 大隅の古江のうらのよもすがら

ゆめも結ばぬ浪のをとかな

子年歳旦

14 はるのたつかすみのせきは

とふけども千代のかずそふ

春となりけり

甲寅の歳旦波見の

うらにて読侍りける

15 神山の峯吹おろすはる風に

あら瀬の川の音のさやけき

16 荒瀬川あらき岩間を行水に

若鮎のぼるはるは来に

けり

子曰

17 なみたてる野べの姫松今朝は早

かすみ棚ひく子日なりけり

根引の松の画のかたに

18 子日来ば誰が手にふれん

姫小松波見の入江も

春立にけり

松に鶴の翅をやす

めしかたに

19 共と見てたづもつばさを

やすむらんおなじ千年の

松のみどりに

真菰ぬしのむ月の末つ

かた故郷にかへられる

有明の海にて別れをおくる

とて

20 月をのみ有明のうらとおもへばか

花をもまたで君かへるらん

返し

21 有明の浦のなごりぞさも

あらばあれ君とめかれぬ

ことをしぞおもふ

安政六とせの時出水へもの

しける比

泉

22 いつみ姫すみしあとこそみへねども

~~いまもその名はながらへてゆく~~

松坂

23 吾妹子が今宵たれをか松さかや

かたぶく月に鳴宝刀、築す

一野森

24 卯の花の咲みだれたるいちのもり

山ほと、きす今やなくらん

日の丸

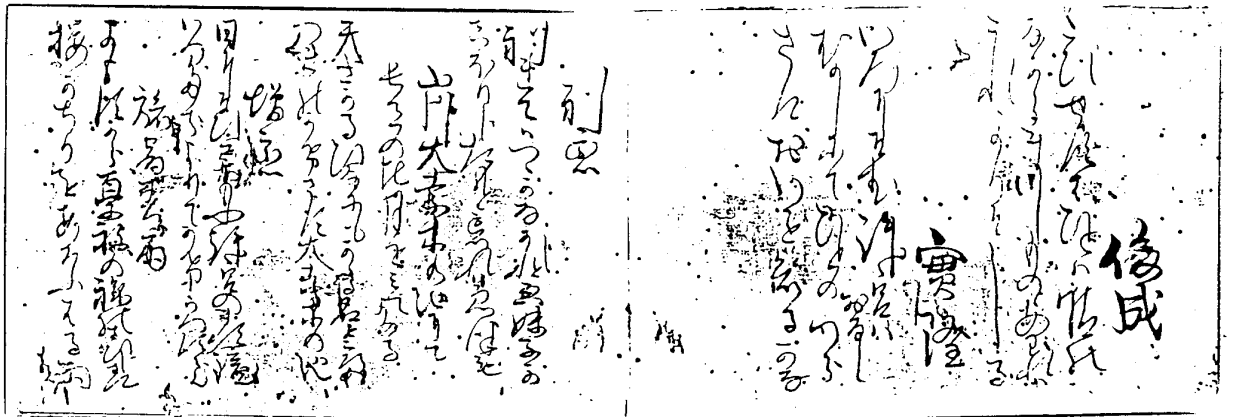
25 日の丸はたが住すてしあとならん

むかし恋しと松虫ぞなく

御所者

26 いそがの神ふりしむかしはしらねども

いづみ姫すみしあとはしらねども



己文月

家集

源朝臣 時言

〔表紙〕

旅宿春雨

4 よもすがら憂ねの旅のさびしさに

桜がちりをあろふはる雨

〔オ〕

俊成

俊成

こひせずばひとは情の

なからましもの、あわれは

これよりぞしる

実隆

いろにそむこ、ろはおなじ

むかしにてひとのつら

さにおいを知るかな

〔見返〕

ふく風になひきくす

6 ふく風になひく青葉の笛竹は

いまもあわれを世々くと鳴らむ

としの内に春立けるに

1 別れてはつ、がなかれと吾妹子が

しぼりしたものと忘れ兼つも

山川大奈木の池にて

長月の比月をみてよめる

2 天さかるひなにもかゝる名どころの

つきのかげさす大奈木の池

増恋

3 日にそひておもふこゝろのます鏡

不逢恋

8 見てしよりこゝろひとつを難波なる

身をつくしても逢む恋哉

別恋

9 夏衣たち別れてはいとひそと

手はなれをしみなきし妹かも

等からみて、安政年間を中心として活躍期をもった人物と考えられる。

この家集の内容から受ける感じでは、大隅高山を中心とする辺りの役人ではなかつたらうかと憶測するのであるが。

表紙に「巳文月」とあるのは、この形態に書き記した年月と思われる。

「巳年」は、安政四年丁巳⁽¹⁸⁵⁷⁾・明治二年己巳⁽¹⁸⁶⁹⁾となるが、安政六年の歌が収まるところからすれば、この形態に記されたのは恐らく明治二年の「巳」年、文月のことではなかつたかと考える。

冒頭部に記された「実隆」の作者名を記す歌——実は三条西実隆の歌ではなく藤原隆信の歌であるが、

いろにそむこ、ろはおなじむかしにて

ひとのつらさにおいを知るかな

を特に記しおいたところからは、このようにまとめた時点での年令のほどもしのばれようか。

家集の構成は、恋歌・大隅での旅の歌・歳旦の歌・出水に出向いた時の歌、また、わずかながら屏風又は障子絵でもあろうか、画を詠んだもの、贈答もまじり、年代順に記されているごとくである。旅の歌が大部分を占め、詞書並びに歌には、山川大奈木の池（鰻池）・奈毛木森・清水台明寺・古江・波見浦・荒瀬川・有明浦・出水・松坂・一野森・日の丸・霧降・渡世口・広瀬川・矢筈・伽志久利神社・大野原・桜馬場・笠山野牧・名護の浦・野間の原 の名勝・歌枕・山・川名等が詠みこま

れている。

詠みぶりにはや、古風な詠みぶりを感じさせるものもまじり、「隆信」の歌を「実隆」の歌と誤り覚えていた感もあるが、22番歌を消し、26番の上句を訂正し、35番歌の部分的訂正をこころみるなど、並々ならぬ和歌への関心をもち、著名な歌人の歌を手本に、勉強もした作者であつたらうことがしのばれる。

翻刻

凡例

本文は、原文を忠実に翻刻することを旨とし、左の要領に従った。

- (1) 文字はおおむね現行通用のものに改めた。
- (2) 仮名遣いは原本通りであるが濁音で読むところには、にごりを付した。
- (3) ミセケチ訂正・墨消歌もそのまま記した。
- (4) 判読困難な文字は、原文字を写真で入れた。虫損で判読困難な箇所は□とし、推定して何とか判読できる程度の箇所は、文字を□で囲んで示した。
- (5) 冒頭の俊成・実隆（実は隆信）の歌を除き、配列順に歌番号を付した。

源朝臣時言『家集』について

福井迪子



ここに紹介する一書は、故有村十太郎氏（生前東京都在住）が鹿児島・宮崎地方に関する研究目的のために巾広く蒐集された資料の中の一書である。氏が生前、宮崎にお住まいであった松本憲融様方に一時寄宿されたことがあった関係で、松本様を経て寄せられた小さな家集である。

その形態は、たて長に半折した料紙を三枚重ねて更に二つ折りにして縫で綴じた、横一三・五センチメートル、縦二〇・二センチメートルの写本一冊。表紙は、上記のものをそのまま縦長に用い、中央上部に「家集」、右肩部に「巳文月」（「巳」の書き誤りであろう）、左下部に「源朝臣時言」とうちつけ書。墨付六丁。本文は横長に用いて、見返しに「俊成」および「実隆」として歌二首が配され形がととのえられている。

自作歌は墨消ちの一首を含めて三十六首。贈答の返歌一首。詞書は歌より一〜二字下げで記され、歌は二行書。

「時言」については今のところ調べがつきかねているが、家集中の22番の

安政六とせの時出水へものしける比
の詞書、また15番・14番の詞書

甲寅の歳旦波見のうらにて読侍りける

（前者「安政六とせ」の近辺の甲寅の年は、安政元年（1854）
子年歳旦

（嘉永五年壬子（1852）・元治元年甲子（1864）。配列を考慮すれば前者と思われる。）